第１回川本来の姿を取り戻すWG　要旨

日　　時：　平成31年２月６日（水）13：30～15：34
場　　所：　高知県香美農林合同庁舎１F　大会議室
参加者数：　22名

1　川本来の姿を取り戻すワーキング会議について

事務局より、資料１に基づき、以下の内容を説明した。

・物部川清流保全推進協議会におけるWGの位置付け
・公共工事での環境配慮の取組や課題
・川本来の姿を取り戻すWGの目的、構成団体、今後の検討の進め方

【主な意見】

○（情報共有及び検討結果の共有）の段階では、工事着手直前ではなく、計画段階（設計委託段階）で工事情報の共有がスタートになる。

○課題の抽出段階では、これまでの工事（事例）に対する意見交換から始めた方が議論が進むのではないか。すべての履歴を追うことはできないが、ワーキングの中で課題がある場所がわかれば、過去の工事情報や構造物の構造などを提示して議論をすすめることも可能。

○今までの工事でも釣り人視点で見て良かったこと、悪かったことを評価できるものがある。そういったものを積み上げて共有してはどうか。

○大前提である「川本来の姿」の共有がまず大切。

○河川委員会で「高知県の川のあるべき姿」を協議したので参考になるのでは。
⇒次回に河川課から資料を提供していただき、議論の参考にする。

【WG検討結果】

○「川本来の姿」を取り戻すためには、多くの課題があるが、本WGでは、河川内での工事に限定して協議を進めていくことを共有した。

○今後の検討に際して、議題２で抽出する課題がある箇所の工事履歴等を整理し、議論を進めることとなった。

2　課題の現状把握及び共有

事務局より、資料２に基づき、課題の共有を行った。

【主な意見】

○本来の姿＝50年前（1958年）の姿で永瀬ダム完成直後の頃になる。当時の物部川の状況は、アユなどの逃げ場になる巨石があり、多くの魚やテナガエビが生息し、約５千人が釣り人を許容できていた。それだけ川の生産力が高かった状況であった。生産力の低下は、小砂利化（石の大きさの変化）によるものと考えられる。（詳細議事概要メモ参照）

○昔の護岸工事では、蛇籠を使っている箇所があったが、現在は、コンクリート護岸に覆土をしている状況。間隔だが、川幅が３倍程度になった印象がある。

○巨石を活用した多自然川づくりにも良いところは多くある。

【WG検討結果】

○次回のWGまでに、課題がある箇所について、事務局で地図に落として全体で共有できる状態にする。

3　物部川の目指す姿（将来のビジョン）の共有

○魚は、遡上の時だけ移動しているわけではなく、出水時には下流に下る。現在は、水量が少ないと魚道に水が乗らないことや出水により魚道下流川に段差が生じており、魚道が機能していない状況にある。

⇒長寿命化対策より先に平成 31 年 11 月頃から災害復旧工事を予定している。統合堰（町田堰）の長寿命化は、平成 32 年度から堰の対策を行い、堰の対策に目処がついたら水路の対策に移行する。今後、設計に入る時に協議していきたい。魚道の機能回復は、施設管理者が実施するが、下流との落差（河床が深掘している部分）については、対応が難しい。

○魚道は、他の川で良かった場合でもいざやってみるとダメなこともあり難しい。作った後もモニタリングするなど効果を確認する必要がある。

【WG 検討結果】

○全体的な将来の物部川のあるべき姿は共有できたが、具体的な将来のビジョンは、課題がある箇所を位置図に落とし、現状課題を共有したうえで、やれることをやっていく方針のもと協議していく。

4　その他

○この WG では、検討することになっていないが、川本来の姿を取り戻すための 1 番の問題は、水量であることの共有が必要。難しい問題ですぐに解決できないが、待っていたら打つ手がなくなることを知ってもらいたい。